



## 第8回

# 「サラの鍵」

— 苦い真実の味わい —

川崎 二三彦

### ノルウェーの謝罪

ノルウェーのストルルテンベルグ首相は、国際ホロコースト記念日の本年（2012年）1月27日、「ユダヤ人の逮捕と強制移送に、警察やその他のノルウェー市民がかかわったことを認めなければならない」「虐殺したのは間違いなくナチスだ。だが、ユダヤ人を逮捕したのはノルウェー人だ。それはノルウェーで行われた」と述べ、ナチス・ドイツのホロコーストに関与したことを公式に謝罪した。

\*

というようなニュースが、つい最近も報じられたけれど、今回取り上げる映画「サラの鍵」は、フランスにおけるユダヤ人の一斉逮捕、強制移送という歴史的事実を取り上げている。

「1942年7月16日から17日にかけて、13,152人のユダヤ人がパリとその近郊で検挙され、アウシュヴィッツに送られて殺害された。かつてこの地点に建っていたヴェロドローム・ディヴェールには、ドイツ占領軍の命令により、ヴィシー政府の警察の手で、1,129名の男性、2,916名の女性、及び4,115名の子供たちが非人道的な条件



の下で収容された。彼らを救助しようとした人々に感謝を。ここを通り過ぎる人々よ、決して忘れるなかれ！」

現場となったヴェルディヴ（屋内競輪場）跡には、こんな碑銘がひっそりと据えられているというのだが、映画の主人公となった10歳の少女サラは、まさにこの中の一人だったのである。

### 巧みな設定

それにしても……。

「過去を見つめ、新たな人生を始める主人公に、あなた自身も揺さぶられるだろう」「シンプルでありながら力強く、深く心に残る作品」「映画館から出てきたとき、心打たれ、この作品の力に気がつくだろう。幸福な気持ちにさえなるだろう」

映画のパンフレットに謳われているこんな惹句が、まだ物足りないときえ思えるほどの出来栄えだ、と感じたのは私だけだったろうか。それほどにこの感動を伝えるのは難しい。

映画を見終わって、「なるほど」と思ったことが一つある。それは、フランスにおけるユダヤ人一斉検挙を調べる記者ジュリアが、フランス人の夫を持つアメリカ人女性だという点だ。彼女は夫をこよなく愛し、愛されている。その彼女が、「ヴェルディヴ 60周年」を特集する雑誌の仕事とはいえ、フランス人の多くが忘れ去った、あるいは忘れ去りたい事件、フランスの歴史の暗い過去を無我夢中で明るみに出そうとするのである。ならばいったいどんなことが起こるのか。アメリカ人が余計なことをすると皮肉りながら、夫が

言い放つ言葉がそれを象徴していよう。

「真実を知って誰がしあわせになるのか、世界が今よりよくなるのか」

この時、2005年のシラク大統領による謝罪演説はまだ行われていない。夫をはじめ、身近な人の心なにかしに何某かざらついた感情が生まれるのは致し方ないだろう。しかも物語の進展にしたがい、それはフランス一般の歴史にとどまらず、夫の両親や祖父母の決して触れてはならない過去にまで、ひたひたと迫っていくのである。歴史を辿るプロセスそのものが、ただならぬ緊張感をもって描き出される秀逸。

### 少女サラの日々

一方、一斉検挙の日、弟を納戸に隠して鍵をかけたまま捕らえられたサラは……。

ナチによる大量虐殺を描いた映画は無数にあり、私自身が観たものだけでも、すでに数えることができないほどだが、フランス警察によるフランス人に対するこうした無慈悲な扱いには、やはり心が痛む。暴行、絶叫の渦巻く中、子を思って絶望の淵に沈む父と母、冷水を浴びせられて親から引き裂かれるサラ。

映画は、1942年のサラと2002年のジュリアを交互に映し出し、二つの時代が次第に交錯していく趣向となっている。そして、ことの真実が明らかになるにつれ、少女サラが経験した60年前の日々が、ジュリアやその夫、夫の家族の“今”を激しく揺さぶるのである。

「僕は知りたくない」

「真実を知って満足か」

夫婦の間には亀裂が生まれ、深まり、二人は苦悩する。

### 過去と現在の融合

だが、これはまだ物語の前半。実は後半で思いがけないクライマックスが待ち受けているのだが、筋書きを紹介

するのは本意でないので、ここでは映画の最後の場面をとりあげる。

3年後、故国アメリカで生活を始めたジュリアが、3歳となった我が子を伴い、ある男性と喫茶店で語り合うシーンだ。幕切れ間際、彼女がさり気なく本作品の主人公サラの名前を口にした瞬間、60年前の過去は現在とみごとに融け合い、物語は深い味わいとともに完結する。

\*

パンフレットに、角田光代が感想を寄せている。彼女は原作小説を読んだ



後で映画を見、「本当に願ったとおり、映像が、小説を読んだときとまったく同じように心にしみいり、揺さぶる」と書いていたが、私は逆コースで小説を読んだ。まさにそのとおり。ストーリーはもう分かっているはずなのに、読み終えてなぜか目頭が熱くなった。映画を見る機会を逸した方、是非とも小説を手にしてください。

鑑賞データ

2012/01/24 横浜ブルク 13

\* 公式 HP <http://www.sara.gaga.ne.jp/>

\* Twitter への投稿 <http://coco.to/movie/16064>

#### <これまでの連載>

- 第1回 「プレシャス」 <http://bit.ly/9qGWXm>
- 第2回 「クロッシング」 <http://bit.ly/rYwUnO>
- 第3回 「冬の小鳥」 <http://bit.ly/eGJ1d9>
- 第4回 「その街のこども」 <http://bit.ly/hzhB9t>
- 第5回 「八日目の蟬」 <http://bit.ly/keXFwL>
- 第6回 「いのちの子ども」 <http://bit.ly/pm8V0p>
- 第7回 「ラビット・ホール」 <http://bit.ly/wF8G4a>